

命名当時の言葉の原義が忘れられたり、使用習慣が変化してり、意味不明になってしまった。例えば、平坂の「平」は傾斜地、「坂」が境界を意味するなどがそれである。

秋田地名研究会「生活と地名」齊藤廣志

## ごじょうめまち【五城目町】

### \*ごじょうめ\*

明治28年9月に五十目村村長北嶋孫吉が県知事に嘆願書を出して3ヶ月後、五城目町が誕生している。この時の町名決定に至る経緯や村会での議決を跡づける議事録などは現在失われてしまっている。

時あたかも日活戦争に勝利して、わが国の近代化が自信の歩調をひびかせはじめたころである。

町となった五城目の近代化も、このころから進み始めるといってよい。郡内では、22年土崎港町・27年船川港町が発足しているから、五城目町は3番目の町である。

**地名を考える** 地名は祖先の残していった貴重な文化遺産であり、歴史を物語る無形文化財ともいえる。「五城目」という町の名前の由来は、町民のだれもが一度は考える問題であろう。

郷土は古代10世紀に「率浦郷」（いさうら又はいそうらと読む）とされた所である。これは古代の人々の集落のできた場所、生活圏の地形から生まれた名前と想像できる。と同時にまた、「率」の<sup>いさ</sup>意味から「果て」の郷ともとれる。

中世に入って、このあたりには磯見浜や石崎<sup>いそざき</sup>というイソのついた村ができたし、浦横町というウラの地名をひきついだ村もできている。古代の率浦郷が、中世の村に引き継がれ残っているのである。五城目の名前がはっきりするのは、町政がしかれてからであるが、それ以前の地名をさぐってみると、中世で述べたとおり「五十目」と書いているし、近世に入ってからも「五十目」「五拾目」などと表記されている。

中世の五十目は、率浦郷から考えて多分イソノ目と読まれたと思われる。イソすなわち海岸または

海岸に近い川岸の船付場に発達した村という意味である。しかし、近世に入ってからイソノ目と読まれたかどうかははっきりしない。

近世中期から後期にかけては、五十目と五拾目が混在し、五十野目というのも文書にみえるから、読むには「ゴジュウノメ」であったと考えてよい。イソノ目はいつの間にか、文字どおりゴジュウノ目と読まれるようになっていったものであろう。注目されるのは、元禄時代から「五城目」というのが出て来ることである。『奥羽永慶軍記』に「五城目兵庫」とあるのがそれで、五城目城主として戦場で活躍している。（五城目兵庫は）秋田安東氏の部将であるが、『永慶軍記』は中世秋田氏などの興亡を描いた元禄年間の著作である。

中世には秋田氏分限帳によると、五十目兵庫・五十目新三郎とあって、五城目とはなっていないから、少くとも元禄年間ごろからの呼び名であろう。そして、江戸時代末に近づくと五城目と書いたものも目につくようになる。菅江真澄もその『遊覧記』の中で、いく度か五城目と書くのである。

五城目がこのころになって出てくるのは、五拾目などとはっきり文字どおり読むようになって、それを中世の城跡の多い土地と読みの音にかけて当て字したためであると考えられる。新町名に五城目を決めたのは、すでに一般で相当用いられていたからであるとも考えられる。

石井三友『秋田繁昌記』の地名考に、『五城目市に集まる人びとは、村に通ずる五条の道を十里四方からやってきたので「五条十里」の集まる所、すなわち五十目である。』として文字どおりの読み方をして説明している。

これはイソノ目の説明にならないが、このような説明が出てくるだけ江戸時代末には一般的に「ゴジュウノ目」と呼ばれていることを示すとともに、市を中心にした繁栄の様子がしのばれるのである。

町政施行の願書にある五城目の故事の誤りは別として、新町名に五城目としたのはまわりに五つの城をひかえたその中心地という意味をこめてである。この説は、イソノ目よりの転化説よりも、